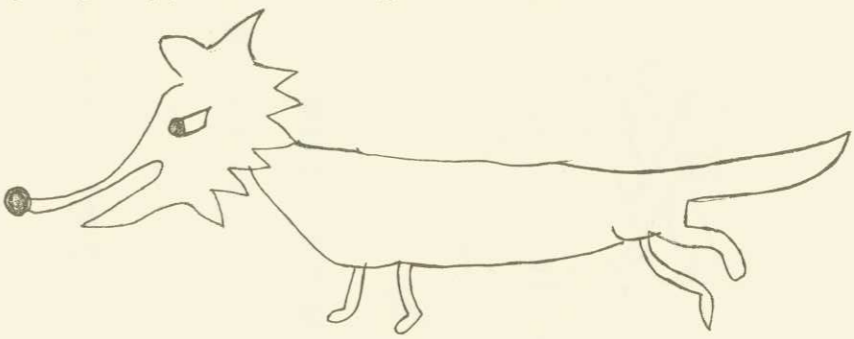


②7 オオカミを生けどりごころ

江戸時代の中頃から寺中と小坂（河和田町）と別司は小浜藩の領地になった。小浜藩の領地は越前には十ヶ村あって、塚原（越前市）に十ヶ村をまとめる大庄屋さまがいた。毎年貢米はここまで運んだ。寺中には、伝治と桶屋という力持ちで鴨居に届くほどの二人の大男がいて、いつも馬の背に荷物をのせて運ぶ仕事をしていた。

十一月のはじめ、庄屋さまから寺中の年貢米を運ぶようにたのまれて、早立ちした二人が別司まで来ると、馬が急に動かんようになった。ほんのり残っている月あかりをすかしてみると、馬の腹にオオカミがかみついていた。伝治は、両手にパツパツとつばをかけると、オオカミにくみつぎ、耳をつかんで、「早う石を持って来い。」とどなった。桶屋はあたりにいかい石がなかったんで、石がきの石をはずして伝治に渡した。伝治はその石で、オオカミの歯をへし折り、生けど



りにして塚原に米と一緒に納めた。

大庄屋の前左衛門さまは、二人の勇気をほめて、「ごほうびを下さったそうな。

②8 テングと友だちに

わかい君らは、テングなんて本当はいないと思うてるやろ。でも、いるんや。どんな姿かっこうをしてるかって。それはだれも見ることがない。

テングには神通力があって、光のように早く走り、空を飛べる。そして、せまいすき間から出入りができ、姿は見せんや。

今から百五十年ぐらい前、寺中の五葉の松の木のある家にテングが遊びに来て、そのお父さんと仲良うなった。げんかんの戸が開かんのに、「お父さんは、「やあびごころ。いぢり入るぢごころ。座敷へ案内するんや。」

ほかの人には影も形も見えん、声も聞こえんのやと。

ある日、テングが、「今日はめずらしい所につれていてやろう。背中に乗れ。今から走り飛ぶけど、ぜったい目を開いたらあかんぞ。」という。そやけどあんまり大きい音がするんで、お父さん思わず目を開けてしもた。とたんにテングは、

「もう重とうて進めん。」というた。あたりは見えたこともない山ん中。今度はぜったい目を開けん約束をして家へつれて帰つてもろたと。

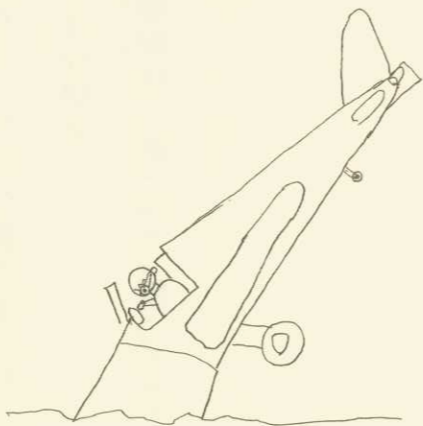
そして、十五年ほどたった明治のはじめ頃、お父さんは神社のよこに小さいお堂をたてて、鉦や笛・太鼓をたたいて、テングとお別れの会をした。

村の人が、「テングはどんなかつこうしてたんか。」と聞いても、だれにも教えなんだんやと。



29 飛行機が落ちた

あれは第二次世界大戦も終りに近い年の夏のお昼ごろだった。飛行機が数機飛んできた。すると、一機だけ波のようにゆれだして、金谷との境の、寺中の山北瀧谷へ落ちてきた。ドカンともものすごい音がして、ひどい土煙があがった。みんなは敵のアメリカの飛行機が落ちたと思った。若い男は戦争に行っていて村にはおらず、じいさんらが竹槍や鍬や鎌を持ってかけた。中には日本刀やなぎなたを持った人もいた。敵の兵隊をつかまえて、手柄をたてるつもりだった。



飛行機はプロペラが半分に折れて、五十メートル先にとんでいた。あとの機体は粉々にこわれていた。飛行士は落下傘で脱出して尾花の山の松の木にひっかかった。竹槍をかまえて待っていたみんなの前に、飛行靴の片方だけはいた兵隊が、腕に付けた日の丸見せながらヨロヨロとあらわれた。みんな肩の力が抜けてしまった。そして手分けしてもう片方の靴をさがしたのだった。